

ラフマニノフの受容研究：〈パガニーニの主題による狂詩曲〉 op. 43 を 中心に

Reception of Rakhmaninov's Music: in the case of the *Rhapsody on a Theme of Paganini*, op. 43

安原 雅之

YASUHARA Masayuki

セルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフは、19世紀末から20世紀前半に活躍したロシア出身の作曲家・指揮家・ピアニストである。彼の作曲した作品の多くは今でも非常にしばしば演奏され、聴かれているが、しかし、作曲家としてのラフマニノフは、かならずしも常に高く評価されているわけではないことも事実である。

ラフマニノフの〈パガニーニの主題による狂詩曲〉 op. 43は、1934年に作曲されたもので、作曲者がロシア革命を機に祖国ロシアを離れた後に書かれた数少ない作品のひとつであると同時に、彼の作品の中でも最も親しまれているもののひとつである。

本稿は、作曲家自身のピアノ独奏による演奏（1934～43年に、初演を含む計38回）に焦点をあててこの曲の受容史を考察し、今日のラフマニノフ像が形成されるプロセスの一面を明らかにすることを目的としている。

Sergei Vasil'evich Rakhmaninov is a Russian composer, conductor, and pianist who was active from the end of the 19th-century through the first half of the 20th-century. He is one of the popular composers whose works are performed, but as a composer he is not always evaluated highly.

His *Rhapsody on a Theme of Paganini* was composed in 1934. It is one of the works that he wrote after he had left Russia, and one of his most popular works.

This paper focuses on the reception of this work both in the West and Russia by examining the criticism.

キーワード：ラフマニノフ パガニーニ ロシア音楽 受容

Rakhmaninov Paganini Russian Music reception

セルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフ Sergey Vasil'evich Rakhmaninov (1873-1943) の〈パガニーニの主題による狂詩曲 Rhapsody on a Theme of Paganini¹〉 op. 43 は、1934 年の 7 月 3 日から 8 月 18 日にかけて、彼がスイスに建てたばかりの別荘“セナル Senar²”で作曲された。

ラフマニノフは、1917 年のロシア革命を機に祖国を離れてから作曲から遠ざかっていた。1926 年には〈ピアノ協奏曲第 4 番〉を書いているが、成功したとは言いがたい。1931 年に作曲した〈コレッリの主題による変奏曲〉 op. 42 は、ヴァイオリニストのクライスラーに献呈されたもので、作品番号がついたピアノ独奏用としては亡命後に書かれた唯一の作品であり、また、彼の最後のピアノ独奏のための作品となった。彼はこの新作を 1931 年から 32 年にかけてのシーズンにおけるリサイタルで演奏しているが、歴代の作曲家たちが使った主題に基づく変奏曲であるという点で、この作品が成功したことは、op. 43 の作曲への直接的な動機付けとなったとも考えられよう。そして〈パガニーニの主題による狂詩曲〉は、ラフマニノフが亡命後に書いた数少ない大規模な作品であり、かつ、彼の全作品のなかでも非常に親しまれる作品のひとつとなった。

1. 〈パガニーニの主題による狂詩曲〉 op. 43 について

この作品は、「狂詩曲 (ラプソディー)」となっているが、題名の「パガニーニの主題による」ということが示唆するように、実質的には変奏曲であり、主題として使われるのは、パガニーニ Niccolò Paganini (1782-1840) の〈カプリス〉 op. 1 の有名な第 24 番の主題である。この第 24 番は、それ自体が変奏曲となっており、全体は、16 小節からなる主題と 11 の変奏、およびフィナーレから構成されている。ラフマニノフは、この主題を用いて、独自の变奏曲を書き下ろしたのである。この主題は、多くの作曲家によって主題として使われているが、リストが 2 度にわたって行ったトランスクリプション、すなわち〈パガニーニによる超絶技巧練習曲 Etudes d'exécution transcendante d'après Paganini〉(1838) の第 6 曲および〈パガニーニ大練習曲 Grandes études de Paganini〉(1851) と、ブラームスによる〈パガニーニの主題による変奏曲 Variationen über ein Thema von Paganini (Studien)〉 op. 35 (1863) が良く知られており、ラフマニノフの〈狂詩曲〉は、しばしばこれら二人の作曲家による作品の伝統を継承するものであると言われてきた。

ラフマニノフの〈パガニーニの主題による狂詩曲〉 op. 43 は、下記の図表のように、序奏と 24 の変奏から構成されている。

¹ 自筆譜の表紙には、“RAPSODIE (en forme de Variation) sur un thème de Paganini pour Piano et Orchestre”と記されている。

² 1931 年に購入したスイスのルツェルン湖畔の土地に立てた別荘。作曲者とその妻の名前の頭文字をとって、セナルと呼ばれた。

〈パガニーニの主題による狂詩曲〉の構成

	発想記号	調性	拍子	備考
序奏	Allegro vivace	a	2/4	
第1変奏	(Precedente)	a	2/4	
主題	L'istesso tempo	a	2/4	
第2変奏	L'istesso tempo	a	2/4	
第3変奏	L'istesso tempo	a	2/4	
第4変奏	Più vivo	a	2/4	
第5変奏	Tempo precedente	a	2/4	
第6変奏	L'istesso tempo	a	2/4	
第7変奏	Meno mosso, a tempo moderato	a	2/4	Dies irae
第8変奏	Tempo I	a	2/4	
第9変奏	L'istesso tempo	a	2/4	Dies irae
第10変奏	Poco marcato	a	4/4	Dies irae の変奏
第11変奏	Moderato	a	3/4	
第12変奏	Tempo di Minuetto	d	3/4	
第13変奏	Allegro	d	3/4	
第14変奏	L'istesso tempo	F	3/4	
第15変奏	Più vivo Scherzando	F	3/4	
第16変奏	Allegretto	b	2/4	
第17変奏	Allegretto	b	4/4	
第18変奏	Andante cantabile	Des	4/4	最後の6小節は2/4でA tempo vivace
第19変奏	L'istesso tempo	a	4/4	
第20変奏	Un poco più vivo	a	4/4	
第21変奏	Un poco più vivo	a	4/4	
第22変奏	Un poco più vivo (alla breve)	a	4/4	Dies irae
第23変奏	L'istesso tempo	a	2/4	
第24変奏	A tempo un poco meno mosso	a	2/4	Dies irae

この“変奏曲”の特徴として、“主題”を提示する前に、“第1変奏”から曲が始まることが指摘されるが、ラフマニノフの作品目録に付された記述によれば、スケッチの段階では“序奏”は直接“主題”に続いており（Threlfall 1982: 140）、“第1変奏”を冒頭に持ってくることは、後から考案されたことがわかる。

調性としては、主調の a-moll から、d-moll (第12～13変奏)、F-Dur (第14～15変奏)、b-moll (第16～17変奏) を経て、第18変奏で Des-Dur に到達する。この変奏は全曲を通して唯一の“アンダンテ・カンタービレ”で、主題は反行形であらわれる。これは、特にラフマニノフらしい非常に甘美な変奏となっており、ある意味で曲全体のクライマックスのような性格を帯び、また、曲全体

の中でも最も親しまれる変奏となっている。また、第7、9、10、22、24変奏で“怒りの日 Dies irae”が引用されている。このグレゴリオ聖歌の旋律は、ベルリオーズの〈幻想交響曲〉(第5楽章)やリストの〈死の舞踏 Totentanz〉に引用されてから、音楽に“死”のイメージを取り込む標題的要素として使われるようになった。ラフマニノフはこの旋律をいくつかの作品で使っているが、〈パガニーニの主題による狂詩曲〉では、そのような標題的な要素としてではなく、この旋律を引用した過去の作品へのオマージュであると考えられよう。

2. ラフマニノフ自身による演奏

〈パガニーニの主題による狂詩曲〉は、1934年11月7日、アメリカのバルティモア(メリーランド州)にて、レオポルト・ストコフスキーの指揮、フィアデルフィア管弦楽団、作曲家自身によるピアノ独奏によって初演された。当時すでに欧米で高名なピアニスト／作曲家であったラフマニノフの新作は大きな注目を集めて、成功を収めた。

この初演から1943年に亡くなるまでの間に、ラフマニノフ自身がこの曲のソロパートを弾いた演奏は、初演を含めて38回が確認された(表2を参照)。コンサート・ツアーの行き先は、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、クリーヴランド、ピッツバーグなど全米の主要都市から、ロンドンをはじめとするイギリス各地やパリなど、ヨーロッパの諸都市にわたっている。共演者の名前も錚々たるもので、ストコフスキー³、ワルター⁴、マルコ⁵、オーマンディ⁶、ビッチャム⁷など、当代の代表的な指揮者／オーケストラと共演していたことがわかる。

³ Leopold Stokowski (1882-1977) : イギリス出身、アメリカで活躍した指揮者。

⁴ Bruno Walter (1876-1962) : ドイツ出身の指揮者。

⁵ Nikolai Malko (1883-1961) : ロシア出身の指揮者。1929年にソヴィエト連邦から亡命。

⁶ Eugene Ormandy (1899-1985) : ハンガリー出身、アメリカの指揮者。

⁷ Sir Thomas Beecham (1879-1961) : イギリスの指揮者。

⁸ この表は、The Rachmaninoff Network と称されるウェブサイトの“Sergei Rachmaninoff: A Performance Diary”(<http://www.rachmaninoff.org/diary.html>)に記載された記録から、該当するデータを抽出して作成した。(閲覧日: 2014年11月7日)

表2：作曲者自身がソロを弾いた演奏の記録⁸

表2

	日付	場所	指揮者	オーケストラ
1	1934/11/07	Baltimore, MD	L. Stokowsky	Philadelphia Orchestra
2	1934/11/08	Washington, DC	L. Stokowsky	Philadelphia Orchestra
3	1934/12/14	St. Louis, MO	V. Golschmann	St Louis Sym. Orchestra
4	1934/12/15	St. Louis, MO	V. Golschmann	St Louis Sym. Orchestra
5	1934/12/27	New York, NY	B. Walter	New York Philharmonic
6	1934/12/28	New York, NY	B. Walter	New York Philharmonic
7	1935/03/07	Manchester (UK)	N. Malko	Halle Orchestra
8	1935/03/21	London (UK)	T. Beecham	Royal Philharmonic
9	1935/11/07	Chicago, IL	F. Stock	Chicago Symphony Orchestra
10	1935/11/08	Chicago, IL	F. Stock	Chicago Symphony Orchestra
11	1935/11/29	Minneapolis, MN	E. Ormandy	Minneapolis Orchestra
12	1935/12/13	Philadelphia, PA	L. Stokowsky	Philadelphia Orchestra
13	1935/12/14	Philadelphia, PA	L. Stokowsky	Philadelphia Orchestra
14	1936/01/13	New York, NY	L. Stokowsky	Philadelphia Orchestra
15	1936/02/05	Paris (France)	A. Cortot	(不詳)
16	1936/02/21	Warsaw (Poland)	L. Matacic	Warsaw Philharmonic
17	1936/03/17	Liverpool (UK)	H. Harty	Liverpool Philharmonic
18	1936/10/16	London (UK)	H. Harty	London Orchestra
19	1937/10/29	Cincinnati, OH	E. Goosens	Cincinnati Symphony Orchestra
20	1937/10/30	Cincinnati, OH	E. Goosens	Cincinnati Symphony Orchestra
21	1937/11/04	Cleveland, OH	A. Rodzinski	Cleveland Orchestra
22	1927/11/06	Cleveland, OH	A. Rodzinski	Cleveland Orchestra
23	1927/11/23	Chicago, IL	E. Goosens	Cincinnati Symphony Orchestra
24	1937/12/02	Pittsburgh, PA	M. Guzikov	Pittsburgh Symphony Orchestra
25	1937/12/03	Pittsburgh, PA	M. Guzikov	Pittsburgh Symphony Orchestra
26	1937/12/24	Boston, MA	S. Koussevitzky	Boston Symphony Orchestra
27	1937/12/25	Boston, MA	S. Koussevitzky	Boston Symphony Orchestra
28	1938/03/10	Manchester (UK)	M. Sargent	(不詳)
29	1938/04/02	London (UK)	T. Beecham	(不詳)
30	1939/11/16	Detroit, MI	V. Kolar	Detroit Symphony Orchestra
31	1939/11/29	New York, NY	E. Ormandy	Philadelphia Orchestra
32	1940/10/22	Chicago, IL	F. Stock	Chicago Symphony Orchestra
33	1941/11/28	Pittsburgh, PA	V. R. Bakaleinikov	Pittsburgh Symphony Orchestra
34	1942/02/12	Los Angeles, CA	B. Walter	Los Angeles Philharmonic Orchestra
35	1942/02/13	Los Angeles, CA	B. Walter	Los Angeles Philharmonic Orchestra
36	1942/12/17	New York, NY	D. Mitropoulis	New York Philharmonic
37	1942/12/18	New York, NY	D. Mitropoulis	New York Philharmonic
38	1943/02/11	Chicago, IL	G. Lange	Chicago Symphony Orchestra

ラフマニノフの新作は、大きな注目を集めていたようである。1934年10月21日付の『ニューヨーク・タイムス』紙の記事 (Activities of Musicians Here and Afield) は、ラフマニノフの初演の予定を告げている。

ラフマニノフの新しいピアノ協奏曲〈パガニーニの主題による狂詩曲〉は、11月7日、バルティモアでストコフスキーの指揮によるフィラデルフィア管弦楽団、そして作曲者自身によるピアノで初演される。ラフマニノフ氏の今シーズン最初のリサイタルは、11月3日にカーネギー・ホールで開催される。(New York Times, 1934.10.21)

また、翌週の記事 (Programs of the Week) にはラフマニノフの顔写真が大きく掲載され、狂詩曲の初演に先立って開催される11月3日のリサイタル演奏曲目一覧が記されている (New York Times, 1934.10.28)⁹。11月3日のリサイタルの批評を書いた音楽評論家オーリン・ダウンス¹⁰は、この「伝統的なプログラム」によるリサイタルについて、「過去に比べて彼のテクニックにはやや陰りが感じられる」と指摘しつつも、リサイタルは「深い感銘を与えるもの」であり、聴衆が絶賛を送り続けたことを書いている (New York Times, 1934.11.04)。この批評が『ニューヨーク・タイムス』紙に掲載された同じ日に、ニューヨークの『ヘラルド・トリビューン』紙には、初演に先立って新作のスコアを見た音楽批評家ローレンス・ギルマン¹¹が、この曲の内容について詳しく説明している (Bentersson 1956: 307-8)。

ラフマニノフ氏の新しい作品は、ここで1927年に聴かれたピアノ協奏曲第4番以来最初の大規模な作品であり、ピアノとオーケストラのための(いわゆる)“ラブソディー”である。それは、形式としては、パガニーニの主題による変奏曲であり、自筆譜には、パガニーニの主題によるラブソディ (en forme de Variations) と記されている。ラフマニノフ氏は、あとから括弧の部分を取ってしまったが、変奏曲は残った!・・・(N. Y. Herald-Tribune, 1934.11.04, quoted in Bentersson 1956: 307-8)

このリサイタルの4日後、1934年11月7日に、アメリカ・メリーランド州の都市ボルティモアで、レオポルト・ストコフスキー指揮、フィラデルフィア管弦楽団、作曲者自身によるピアノ独奏によって、初演された。『ミュージカル・クーリエ』誌に掲載された通信は「あらゆる意味で、重要な作品ではない」と言いつつも、「確かに一聴に値する作品である」と指摘している。このような、やや否定的なコメントは、ラフマニノフの作品についてはしばしば見受けられるものだが、初演は、聴衆には熱狂的に迎えられたと伝えられている。

初演のあと、ワシントンDCとセントルイスで計3回の演奏会を終えたあと、1934年12月27日と28日、ブルーノ・ワルター指揮、ニューヨーク・フィルハーモニックによる、注目のニューヨーク公演が行われた。プログラムには、この作品のほか、シューマンの交響曲「春」、ラヴェルの〈ス

ペイン狂詩曲〉、そして、アメリカの作曲家ダニエル・グレゴリー・メーソン¹²の〈イギリス民謡による組曲〉が演奏された。『ニューヨーカー New Yorker』誌の音楽評論家ロバート A. シモン¹³は、ラフマニノフについて次のように書いている。

主題にもとづく変奏曲の作曲については、レーガーが作曲した〈ヒラーの主題による変奏曲〉¹⁴によって衝撃を与えられたのであったが、ラフマニノフ氏は、〈パガニーニの主題による変奏曲〉をもってこの産業を復旧し、その作品はワルター氏の交響的セッションで紹介された。その主題は、変奏曲用に強化されたもので、パガニーニ自身が11の変奏を書いたほか、ブラームスが2巻のエチュードに仕立て上げた。ラフマニノフ氏は、これまでの全ての実験に、さらに24の変奏を付け加えた。パガニーニの小さなカプリスには、何か魔力があるに違いない。ラフマニノフの変奏曲は、作曲家の技量を全て発揮して書かれており、トスカニーニ氏がラヴェルの〈ボレロ〉で聴衆を圧倒して以来の、最も成功した新しいものである。もちろん、狂詩曲はラフマニノフ氏のピアノイズムとワルター氏の巧みな指揮によるところが大きい、絶え間なく続くピアノの素晴らしさ、〈怒りの日〉の言及、分割された弦楽器の極端な感傷主義、古くさいブラヴァーラなどが、成功を確かなものにするに充分だった。狂詩曲は、哲学的でなく、意味深長でなく、さらに、芸術的ではない。それは聴衆のためのものであって、いま私たちのオーケストラが必要としているものは、聴衆のための更なる音楽なのである。それはまた、音楽が更なる聴衆を必要としていることを意味している。そして、そのような格言をもって、私はラフマニノフ氏を祝福したい。(New Yorker, 1935.01.12 下線は筆者による。)

シモンは、〈狂詩曲〉は歴史的を逆行するものであり、「芸術的ではない」と言うほど、作品の内面的な側面は全く評価していないが、一方でそれは聴衆に寄り添ったもので、聴衆が乖離してしまった現代音楽に疑問を投げかけている。

同じ演奏会について『ニューヨーク・タイムス』紙のダウンズは、次のように書いている。

⁹ このリサイタルのプログラムは、次の通り：Bach-Tausig, Toccata and Fugue in d minor; Beethoven, Sonata op. 10, No. 3; Brahms, Ballade in g minor; Chopin, Tarantelle, Mazurka, Scherzo; Rachmaninoff, Prelude, Moment Musical, Oriental Sketch; Liszt, Sonnetto de Petrarca, Dance of the Gnomes, Rhapsody No. 11.

¹⁰ Olin Downes (1886-1955)：アメリカの音楽評論家。1924年から1955年まで『ニューヨーク・タイムス』紙の音楽欄の執筆を担当し、多大な影響力を持った。

¹¹ Lawrence Gilman (1878-1939)：アメリカの音楽評論家。1925年から、『ヘラルド・トリビューン』紙の音楽評論を執筆した。

¹² Daniel Gregory Mason (1873-1953)：アメリカの作曲家。ハーヴァード大学で学んだ後、コロンビア大学で教授となる(1929-42)。

¹³ Robert Alfred Simon (1897-1981)：1925年から1948年まで『ニューヨーカー』誌の音楽批評を担当した。

¹⁴ レーガー Max Reger (1873-1916) が、ドイツの作曲家ヒラー Johann Adam Hiller (1728-1804) による旋律をもとに作曲した〈変奏曲とフーガ Variations and Fugue on a Theme by Hiller〉 op. 100 (1909) のこと。

昨夜、ブルーノ・ワルターとフィルハーモニック交響楽団によるコンサートのあと、カーネギー・ホールを出た聴衆たちは、ひとつの忘れることのできない経験、つまり、作曲家であり、そしてピアニストであるセルゲイ・ラフマニノフの演奏を口々にしていた。……彼の人格ゆえか、あるいは圧倒的なピアノの演奏の質によるか、いずれにしても、コンサートの頂点はラフマニノフであった。……彼の変奏曲において、ラフマニノフ氏のスタイルは折衷主義的であると言えるだろう。……スコアは非常に重厚であるが、ラフマニノフ氏は、演奏者として、襲いかかるオーケストラに戦くことも全くなかった。ワルター氏と彼のオーケストラと素晴らしいコラボレーションにおいて、彼は昨夜の演奏をリードし、ただちに成功を勝ち得た。……ラフマニノフ氏に嵐のような拍手が送られ、彼をいつまでもステージに引き止めた。(New York Times, 1934.12.28)

ダウズは、この日のプログラムで、ラフマニノフの作品が他を圧倒するような成功を収めたことを、さまざまな表現で賛美している。

これらの批評からは、ラフマニノフによる演奏が圧倒的に素晴らしかったことと、作品は懐古的であるが聴衆に寄り添ったものであることが、読み取れる。この時期の他の演奏会評にも、同じ傾向が見られる。

イギリスの批評家コンプトン・パケンハム¹⁵は、その曲の新しい録音について次のように書いている。

作曲家として、その主題を使うことの想像力と正気さについて、彼の同時代人から浮いていると見なされるだろう。……電化以前の時代にも、ラフマニノフはグラモフォンのピアノの音をオリジナルに近いものにできていた。彼の録音の質は常に高い。演奏会の録音では、いつもフィラデルフィア管弦楽団を使っているが、このコンビはさらに強くなっている。ビクター・アルバム 250 は高く評価できる。(New York Times, 1935.04.14)

1935年11月29日のミネアポリスにおけるコンサートでは、全てロシアの音楽でプログラムが構成されていた¹⁶。『ミネアポリス・スター』紙で、ジョン K. シェルマン¹⁷は、次のように書いている。

昨夜、多くの人を驚かせたのは、遠い昔の優れた知恵のお告げ人のような男から、彼がオーケストラと演奏するために選んだ曲の、明敏で、リスト風の華やかさを持ち、かつ全くのいたずらのような作品が出て来たことであった。そして、その〈パガニーニの主題による狂詩曲〉は、去年作曲されたばかりなのだ。(Minneapolis Star, 1935.11.30, quoted in Bertensson 1956: 315-316)。

これもまた、この作品が古典的なレパートリーではなく、作曲されたばかりの新曲であることを皮肉まじりに言及している。

3. 結びに代えて

1939年には、この曲に基づくバレエ《3場の幻想的バレエ、パガニーニ Paganini: Fantastic Ballet in Three Scenes by R. Rachmaninoff and M. Fokine》が制作され、同年6月30日にロンドンのコヴェント・ガーデンで上演され、この曲はあたらな展開をみせることとなった。作曲者自身の協力によってスコアは改訂され、第18変奏は、Des-Durから半音上げられてD-Durとなった。

また、全曲のなかでも特に親しまれている〈第18変奏〉のみが、クライスラーによってヴァイオリンとピアノのために編曲されて出版されるようになった。ラフマニノフの作品目録 (Threlfall 1982) には、フリッツ・クライスラーが編曲したD-Durのヴァイオリンとピアノ版 (Charles Foley, ed. no. 1170) が記載されている。その年に、同じ版がCarl Fischer社からも出版されている。さらに、それがピアノ独奏用に編曲されたものが、少なくとも2つ確認されている。セシリー・ラムベルト Cecily Lambert による編曲と、エルメーヌ・アイヒホルン Hermene W. Hichhorn による編曲で、いずれも1953年にCharles Foleyから著作権の許可を得て出版されており、アイヒホルン版の方が演奏の難易度が高い。また、1955年には、エセル・スミス Ethel Smith 編曲による、 Hammondオルガン用の版も出版されている。最近では、ヴァイオリンとピアノ版で、ジョン・ヨーク John York による新しい編曲版がBoosey & Hawkesから2003年に出版された。その他、さまざまな楽器用に編曲されたものが、次々と出版されている。

ラフマニノフの〈パガニーニの主題による狂詩曲〉は、聴衆に理解される作品であり、それが作曲者自身の卓越した演奏によって圧倒的な賞賛を得てきたことが、当時の批評から読み取ることができる。同じようなパターンの批評が繰り返しメディアに登場したことによって、メディアにおけるラフマニノフに関するスタンダードな言辭のスタイルが確立していったと考えられる。そこに、この作品に基づくバレエ作品が加わり、また〈パガニーニの主題による狂詩曲〉の第18番の編曲が家庭用にまで普及したことで、この作品の“大衆化”がすすんだと言えるのではないだろうか。

¹⁵ Compton Pakenham: イギリスの音楽批評家。詳細不詳

¹⁶ ラフマニノフの〈パガニーニの主題による狂詩曲〉のほか、ラフマニノフの交響曲第2番、リャードフの〈8つのロシア民謡〉。

¹⁷ John K. Sherman: 詳細不詳。

主要参考文献

- Bertensson, Sergei and Jay Leyda. 1956. *Sergei Rachmaninoff: a Lifetime in Music*. New York: New York University Press. (New edition in 2001. Bloomington: Indiana University Press. With new introduction by David Butler Cannata.)
- Keldysh, Yury V. 1973a. *Rakhmaninov i yego vremya* [Rachmaninoff and his time]. Moscow: Muzyka.
- Piggott, Patrick. 1978. *Rachmaninov*. London: Faber and Faber. (The Great Composers Series.)
- Schwarz, Boris. 1983. *Music and Musical Life in Soviet Russia 1917-1981*. Bloomington: Indiana University Press.
- Threlfall, Robert, and Geoffrey Norris. 1982. *A Catalogue of the Compositions of S. Rachmaninoff*. London: Scholar Press.

New York Times 紙に掲載された記事

1934.10.21 "Activities of Musicians Here and Afield."

1934.10.28 "Programs of the Week."

1934.11.04 "Music in Review": Sergei Rachmaninoff Plays Program of a Traditional Order in Piano Recital at Carnegie Hall." By Olin Downes.

1934.12.23 "Programs of the Week."

1935.04.14 "Rachmaninoff's Rhapsody on a Theme of Paganini—Several Ravel Releases." By Compton Pakenham.

1935.01.11 "Ocean Travelers."

New Yorker 誌に掲載された記事

1935.01.12 "Musical Events: Another Hit for Mr. Rachmaninoff—More American Music—Metropolitan# by Robert A. Simon.